

幼児の原子価の測定の可能性について

— Valency Assesment Test for children (VATch) の
妥当性と信頼性に関する実証的研究 —

河原崎 聖子*

Measuring The Child's Valency: An empirical study on the validity and
reliability of Valency Assesment Test for children (VATch)

Seiko KAWARASAKI

要 旨

本研究目的は、子どもの原子価を測定するテストVATch (Valency Assesment Test for children) の妥当性と信頼性の吟味を行なうことである。VATchは筆者らが2004年に子どもの原子価を測定するために開発した投影法式の絵本テストをデジタル化し、改訂したものを使用する。さらに、このテストの妥当性と信頼性の吟味を行う方法として、Hafsiの4つの原子価の特徴的なものを参考に筆者が作成した実際の尺度を用いた。この質問紙は、それぞれの原子価の特徴が実際の行動に反映されているかどうかを測定するものである。対象は、3歳から6歳の幼稚園に通う園児で、VATchを施行し原子価が決定した後幼稚園の先生に対し子どもの実際の尺度を施行した。

結果は、実際の尺度の信頼性は確認され因子分析もできたもののサンプル数の少なさもあり、妥当性と信頼性についての検討を行うまでには至らなかった。今後は、サンプル数を増やし原子価と尺度の相関等も見えていく必要があると考えられる。

I. 問 題

本研究はWilfred Bion (1961) とHafsi Med (1997) による「原子価 (Valency)」という概念とそれを測定するために筆者らが開発したテストの信頼性と妥当性に関するものである。したがって、本研究の目的を述べる前に基本的概念である原子価とそれに関する諸概念や理論、特にBionの集団論についてまず述べてみたい。

1. Bionの基本的概念

対人関係や個人の繋がりについてBionは化学から「原子価 (Valency)」という概念を用い対人関係や個人の特性の説明を試みた。すなわち、Bionは人間が原子と同様に原子価を持ち、原子同士のように結合すると考え、原子価を、「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結

平成18年9月29日受理 *社会学研究科

合する能力]、また「基底的想定 (basic assumption)」を創り出したり、それに基づいて行動したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態 (readiness) として定義している。

また、グループについてBionはあらゆるグループ活動には、同時に存在する2つの対照的な機能的水準があると述べている。1つは現実中心の水準である「作動グループ (work group)」, もう1つは感情的水準である「基底的想定グループ (basic assumption group)」であり、これらはグループ活動における基本的な機能であると言える。

次に、作動グループと基底的想定グループについて述べる。

作動グループ (work group)

作動グループは、現実と関係をもち、現実原則に基づく活動である。そのため、時間の流れと発達を意識したり、重視したりすることによって特徴づけられる。グループは、自ら「協同 (cooperation)」し、作業に不可欠な知識・訓練・経験・技能をもっており、「基本的作業 (basic task)」に没頭しているグループを形容するものである。

作動グループは、グループの存続や発達のためには不可欠である。しかし、それらはメンバーにとって苦痛を伴うものであるため、回避する方法として基底的想定グループを利用する。Bionはこれらの作動グループの特徴がFreudによって記述された自我の特徴に酷似すると述べている。

基底的想定グループ (basic assumption group)

基底的想定グループは、作動グループと共存する、無意識的、衝動的、幻想に基づく1つの心的活動である。つまり、現実に基づく作動グループと異なり、基底的想定グループにおけるグループ活動は、幻想に基づいているのである。その幻想の内容は、支配的になっている基底的想定によって異なる。

Bionは、基底的想定グループでは、時間はどの役割も果たさないこと、グループの成長や発達を促す刺激は、敵対反応に示すことを特性としている。作動グループは、発達に伴う苦痛を回避するために基底的想定グループに頼るが、その結果、両グループの間には「勝ったほうがグループを支配する。」という関係が成立する。

Bionによれば、基底的想定グループは、「依存基底的想定 (basic assumption of Dependency)」、「闘争/逃避基底的想定 (basic assumption of Fight/Flight)」、「つがい基底的想定 (basic assumption of Paring)」という3つがあるという。上述したように、これらのうちの1つは常に作動グループと共存しているが、選ばれる基底的想定グループは、時間の経過とともに変化していくのである。

以下は、3つの基底的想定グループの分類である。

依存基底的想定 (basic assumption of Dependency)

依存基底的想定におけるグループは、「今、ここ」ではない過去中心である。共有幻想は、グループが未熟で、他者の援助や支持がなければ何もできない、そしてリーダーを含む他者は全知

全能であると信じることにある。また、リーダーとの関係においては、Melanie Kleinの「理想化」、「貪欲」、「否認」、「羨望」、等の早期の精神病的態勢によって特徴づけられる。依存基底的想定の影響下にあるグループは、無力感、低い自己評価、消極性、モチベーションの低下や抑うつ的な事象を含む心的状態に陥り、メンバーはリーダー等の人々を理想化し、頼ろうとする。このような、グループによるリーダーへの依存的な反応は、依存基底的想定の「単純形態」という典型的な側面である。

また、依存基底的想定にはBion (1961) の言う「baDの二面性 (dual of baD)」という側面があるという。それは、グループが自分達の依存願望を投影（投影同一化）することによって、1人のメンバーを依存状態におき、世話をしたり、面倒をみたりすることによって依存を満たしていくことを意味する。この目的は、メンバーに同一化し、間接的かつ無意識的にグループ全体の願望を満たそうとすることである。

闘争・逃避基底的想定 (basic assumption of Fight/Flight)

闘争・逃避基底的想定におけるグループは、「今、ここ」である現在中心である。特徴的な幻想は、内部や外部には何らかの“敵”が存在していて、敵と闘うかもしくは避けるしかないというものである。したがって、グループには行動（行動化）が不可欠である。

グループの風土としては、疑惑・挑発的発言などの言語的攻撃という側面と、幻想的な敵に対する抵抗グループの作業の回避という側面によって特徴づけられる。さらに闘争／逃避基底的想定にはグループの存続のためには、個人を犠牲にするという側面が見られる。この傾向は、Kernberg (1980) が述べているように、グループは「多数のメンバーに共有されるグループの観念形態に対するいかなる抵抗も許すことはできない。」というもので、それを乱すメンバーに対してグループは攻撃性を持ち、「スケープゴートイング (Scapegoating)」に頼ることで逸脱者を阻止するのである。

闘争・逃避基底的想定におけるリーダーは「敵」といかに闘うかあるいは逃げるかに対して能力を発揮できると思われる人が選出される。つまり、リーダーは敵が存在しないときにはスケープゴートという存在を作り出し、また同時にグループ全体を重視し、勇気、自己犠牲、敵に対する憎しみを促進することが期待される。

つがい基底的想定 (basic assumption of Paring)

つがい基底的想定におけるグループは、「いつか」である未来中心である。特徴的なグループの幻想は、これから生まれてくるであろうリーダー（救世主）が不安と恐怖からグループを救い出してくれると信じていることにある。

グループの中心的存在は、2人のメンバーでありその2人がグループを支えていくような環境を作り出す。この2人は必ずしも性別が男女である必要はないが、無意識的であるにせよ言語的・非言語的な相互作用には常に一定の性的な要素が含まれる。そしてこのつがいの任務は、グループの抱えている「将来、新たなリーダーが自分たちを救ってくれるだろう」という未来への期待である幻想の「救世主的 (Messianic)」な存在、あるいは「救世主 (Messiah)」を産むこと

や創造することである。

グループの風土としては、未来への強い関心、希望と期待、親しみ、過度な幸福感、楽観主義が挙げられる。さらにこの中でも特徴的なのは、男女関係や「生殖」や「誕生」にまつわる話で、これらの興味を言語化するようになれば、つがい基底的理想の影響下にあるといえるだろう。

以上が、Bionの基本的概念である原子価とそれに関する諸概念や理論、特にBionの集団論についての論述である。

続いて、原子価の分類について、Hafsiの理論に基づいて述べていく。

2. Hafsiの理論

Bionは、対人関係や個人の特性に対して原子価を用いて説明を試みたが、原子価の類型について述べていない。だが、幾つかの論述によると原子価のタイプは基底的理想のものと同様であり、「依存 (dependency)」、「つがい (paring)」、「闘争・逃避 (fight/flight)」が存在するという。その後、Bionの集団理論に基づく様々な実証的研究を行ってきたStock&Thelenは理由を述べずに「闘争」と「逃避」に分離させ、4つのタイプになるタイポロジーを提唱した。

原子価の類型に対する問題としては、原子価のタイプに関するものである。Bionのみならず、後の研究者もこれについては触れていない。そこで、この原子価の4タイプの特性について明確にしたHafsiの理論について論じていきたい。以下は、Hafsiのいう4つの分類と特徴である。

依存 (dependency)

主要な特徴は、自己評価や自尊心が低く、自分は無力だと感じ、他者を過大評価する傾向があることである。依存の原子価は、いろいろな意味で他者が自分より優れていると無意識的・意識的に考えるのでその人と繋がるために縦的人間関係に頼る。また、自分よりも衰えていると見なされる人に対しては同一化による共感を示し、本人の依存を受け入れ、なおかつ満たそうとするという相互作用的依存なのである。

つがい (paring)

主要な特徴は、元気で明るい印象を与える平和主義者であり、暖かく親しい対人関係を好むという傾向があることである。楽観主義者でもあり未来志向で交友関係は広いが、対象とは深く付き合わない。また、関係を性愛化する傾向があるのもつがいの原子価の特徴である。

闘争 (fight)

主要な特徴は、敵を意識していることによる、競争心、敵意、攻撃性、批判などである。また、頑固で気難しく負けず嫌いである。闘争の原子価は、競争や批判、討論などで他者との繋がりを求めているようにも見える。また、現実主義者でもあり、行動的であるためグループの中では仕切り役になることが多い。

逃避 (flight)

主要な特徴は、葛藤回避、過剰な遠慮、距離感、プライバシー重視である。逃避の原子価は、葛藤を破壊的な要因として体験するため、葛藤のない人間関係を好んだり結んだりする。そのため、人との距離を一定に保っており、深い付き合いを避ける傾向にある。また、依存することは迷惑なことであると感じるため、できるだけそれを避けようとするので個性的な印象を他者に与えやすく、一見して内向的かつ冷たそうに見える。

Hafsiによれば、人はすべての原子価を示すことは可能だが、1つの主要なあるいは「活動的原子価 (active valency)」があるという。(Hafsi, 2006) そして他の3つの原子価は、「補助的原子価 (auxiliary valency)」である。つまり、人は1つの活動的原子価と3つの補助的原子価をもっているということである。補助的原子価を用いることによって、人は状況によって、対応し適応することができるようになるのである。

3. 原子価の測定について

VATはStock & Thelen (1958) が開発した文章完成方式のRGST (Reaction to Group Situation Test) を基にHafsi (1997) が原子価測定を行うためにRGST-Nuを開発し、それを再度Hafsi (2005) が改正したものである。Bionの集団論に基づく様々な実証的研究を行ってきたStock & Thelenは、RGSTを開発したが、このテストには多くの問題があった。というのも、明らかなマニュアルはなく、整理されたものではなかったため扱うことは難しかったのである。この問題を解消するために、Hafsiは日本語に訳し、テストの構造や項目の解釈、採点法に関するいくつかの根本的な修正を加え、RGST-Nuを開発した。その上で、さらにいくつかの研究を行い、問題点が見つかったため、再度RGST-Nuを改正しVATとした。

VATは、依存5項目、闘争5項目、つがい5項目、逃避5項目、協同指標5項目の全25項目からなる文章完成方式のテストである。対象年齢は、特に定められてはいないが理解力・文章構成能力を要するため小学校高学年以上が妥当と思われる。実施方法は、様々だが、一般的には調査者が質問項目について読み上げ、一定の時間内に対象者が回答を質問紙に記入するという方法で行われる。採点は、刺激に対してどのように反応するか注目しマニュアルを参考に得点化する。得点化されたそれぞれの項目の平均を求め、比較し、そのうち最も高い平均値である原子価を活動的原子価、その他の3つの原子価を補助的原子価とする。

以上に基づいて、子どもの原子価を測る試みがなされた。続いて、本研究の目的にはいる。

II. 目的

本研究目的は、子どもの原子価を測定するテストVATch (Valency Assessment Test for children) の妥当性と信頼性の吟味を行なうことである。

使用するのはVATを基にして開発された子どもの原子価を測るテストである。VATは、上述

した通り文章完成方式のテストであるため、ある程度の言語能力や文章構成能力を必要とした。そのため、幼児や児童には実施は不可能であった。原子価は、自我が確立し始める4～5歳に決定すると考えられており、この点から考えても子どもの原子価を測定するテストが必要であると考えられたため、子どもに対して原子価の測定を実施するために投影方式のテストVATch (Hafsi、河原崎、又吉ら、2004)を開発した。そこで、本研究ではVATchとVATchによる原子価の結果が子どもの行動に実際に反映されているかを測定する尺度を用いてテストの妥当性と信頼性についての吟味を行なうことを目的とする。

続いて、この目的に用いる尺度であるVATchの開発過程について順をおって記述する。

Ⅲ. VATchの開発過程

上述したように、原子価を測定するテストとしてはVATという文章完成方式のテストしか、存在していなかった。そのため、幼児の原子価を測定するためにはまず、1から開発をしなければならなかった。Figure 1に示したのはVATchを開発するまでの過程である。開発は、VATを基に行われた。

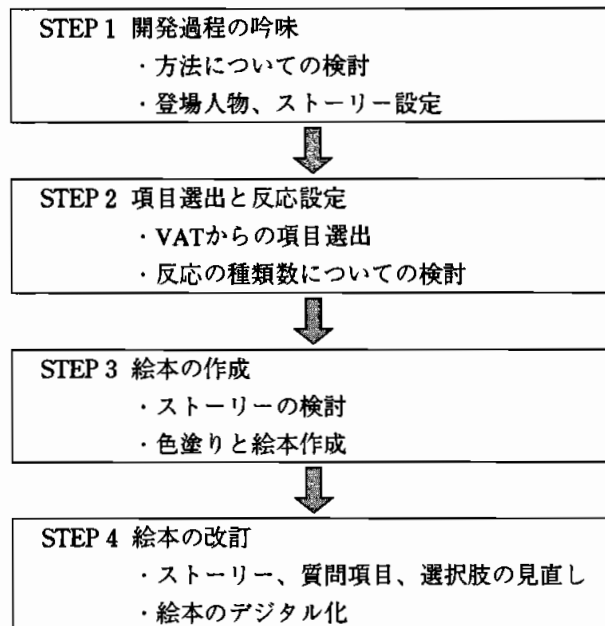


Figure 1 VATchの開発過程

1. 開発過程の吟味

子ども版への改訂を行う上で最も重要なのが、VATの項目をいかにわかりやすく理解しやすい形にして開発するかという点である。そこで、筆者らはどのように開発を進めていくかについて話し合うことから始めた。まず、最優先に考えたのは“子どもの興味をひくテストの実施方法”

である。質問に答える環境や子どもの興味をひくような内容でなければ、正確な原子価を測定することは難しいと考えられる。そのため、実施方法についていくつかの方法を吟味することにした。

案として出されたものが動物たちが登場人物である人形劇、絵本、紙芝居の3つである。この3つはいずれも子どもが興味をひくものである。そのため、どれも適切であるように思えた。VATの実施点から考えると、ほとんどの場合、講義の中で実施するため集団の中で個人が文章で回答していく方法である。つまり、1度の多くのデータをとれるというメリットがあった。その点から考えても集団に対して施行できる方法がよいと考えられた。だが、集団に対する実施方法であると年齢の対象が3歳児からでは周りの友達に同調したりしてしまい、確実なデータをとることができないのではないかと懸念された。そのため、人形劇、絵本、紙芝居のうち実施の時間や手間はかかるが、絵本を調査者1人に対し、対象者1人という形で実施することにした。

続いて、絵本の概要について話し合いを行った。VATでは文章に対する回答は自分で考え、記入することになっているが、子どもにはその方法は困難である。そのため、遊びながらテストに参加するほうが、集中力を持続させることもできるのではないかと考え、クイズのように物語の中に質問をおりませ、回答は選択肢の中から選ぶという方式で行うことにした。

2. 項目選出と反応設定

次に、物語中に組み込む質問項目の選出をVATの質問紙から選出した。ここで気をつけたのが物語にしやすいような内容やVATの性質として最もでているような質問内容の選出を行うことであった。物語や絵にしたときに、わかりにくいものであったり細かい表現やニュアンスが必要となるものでは、テストとして使用しにくいのである。

VATの質問項目は、依存、闘争、つがい、逃避、協同指標はそれぞれ5項目からなっており、合計が25項目であった。しかし、VATchの場合は子どもたちがそれだけの項目の質問に答えられるかどうかについて懸念されたため、必要最小限にとどめることとなった。子供たちの集中力等を考え、VATから依存2項目、闘争2項目、つがい2項目、逃避2項目、協同指標2項目の計10項目で物語を形成することに決定したのである。Figure 2は、選出した項目を表にしたものである。

VATからの項目選出後、反応の設定について検討を行った。VATでは、回答を反応別に8つに分類している。しかし、VATchの場合は絵本の質問に対する選択肢として反応しなければならない。よって、よりシンプルにするために否定的明白な言動、否定的曖昧な言動、否定的感情的反応、否定的知性的反応、肯定的知性的反応、肯定的感情的反応、肯定的感情的反応、肯定的曖昧な言動、肯定的明白な言動の8つの反応の分類を否定的言動、否定的感情的・知性的反応、肯定的感情的・知性的反応、肯定的言動の4つの反応に設定した。

続いて行ったのが、項目に対する回答の選出である。否定的言動、否定的感情的・知性的反応、肯定的感情的・知性的反応、肯定的言動の4つの反応がわかりやすく示されているものを選出することで、子どもが理解しやすいものとなると考えられた。そのため、VATマニュアルの中か

らわかりやすい反応を選出し選択肢とした。

- Q1 つがい項目：太郎は次郎と…。
- Q2 つがい項目：太郎と花子が20分遅れてきたときグループは…。
- Q3 協同指標：太郎が「問題に取り掛かろう」といったとき私は…。
- Q4 依存項目：リーダーが太郎を助けようとしたとき、太郎は…。
- Q5 闘争項目：討論の最中に太郎の攻撃性が次郎の…原因になった。
- Q6 逃避項目：グループのみんなが自分勝手な行動をとっていると感じた太郎は…。
- Q7 協同指標：グループは提案されたやり方を試したかったので太郎は…。
- Q8 依存項目：グループがうまく機能しなくなったとき私は…。
- Q9 闘争項目：グループに対して敵意を感じたとき太郎は…。
- Q10 逃避項目：次郎が冗談を言い出したときグループは…。

Figure 2 VATからの選出した項目

上記のように絵本の概要が決定したため、続いては絵本の具体的な物語や登場人物の設定を含めた作成に入った。

3. 絵本の作成

開発の初期から考えられてきた絵本の概要を基に実際に絵本の作成に入った。まず、物語と登場人物の設定を行った。VATでの場面は明らかな設定はされていないが集団における共同作業が設定されている。そのため、VATchにおいても集団の共同作業を用いることが重要だと考えられた。そこで、みんなで1つの家を作るまでの過程を物語として採用することにした。登場人物は、初期の段階で子どもたちが受け入れやすい動物たちに決定していたため、「お菓子の国に住んでいる動物たちがお菓子の家を作るまでの過程」に設定した。続いて、選出した項目をお菓子の国の出来事に置き換えて物語を作成し1つの物語にしていった。ここで注意したのは言葉である。私たちが普段理解している言葉であっても子どもたちには通じない可能性もあるためできるだけシンプルでわかりやすい言葉を選びながら物語と選択肢を作成した。その後、下書き・ペン書き・色塗りを行い原本を作成し、カラーコピーをした後製本をして初版(2004)の作成が完了した。

4. 絵本の改訂

初版の作成後は、絵本の改訂に入った。改訂は、奈良大学附属幼稚園の先生方に絵本に目を通してもらいインタビュー調査をするという方法と、実際に子どもたちにVATchの実施が可能かについての調査を行うという方法で行った。先生方には、質問項目や物語の中のわかりにくい表現などを子どもたちの視点から指摘していただき、VATchの施行では幼児の様子について気づいた点などを書きとめながらそれを参考に不十分な点を改訂していった。

続いて行ったのは、絵本のデジタル化である。初版は手書きのカラーコピーであった。それを、

ペイントショップに移した後、それぞれのキャラクターの色を修正して製本を行った。

Ⅳ. 方法

1. 調査対象

本研究において対象にしたのは奈良大学附属幼稚園の園児76名である。そのうち、年齢から見れば3歳児13名(17.1%)、4歳児18名(23.7%)、5歳児26名(34.2%)、6歳児19名(25.0%)の男子48名(63.2%)、女子28名(36.8%)であった。

2. 尺度

本研究の目的は、子どもの原子価を測定するテストの妥当性と信頼性の吟味を行なうことである。従って、成人の原子価を測定する文章完成方式のテストVATに基づいて子どもの原子価を測定するテストを作成した。以下、そのテストをVATchと呼ぶ。すなわち、前述したようにVATchの結果は子どもの実際の行動に示されているかを調査する。そこで、本研究では2つの尺度を用いた。第1尺度は子どもの原子価を測るテストVATch、第2尺度は幼稚園における先生から見た実際の行動を測る尺度である。

続いて、それぞれの尺度の内容と作成過程について述べる。

(1) VATch

幼児の原子価を測定するためにVATch (Valency Assessment Test for children) という投影方式のテストを施行した。このテストは、Stock & Thelen (1958) のRGST (Reaction to Group Situation Test) Hafsi (1997) に基づいて開発されたVAT (Valency Assessment Test) の子ども版である。

原子価は、自我が確立し始める4～5歳に決定すると考えられているが、これまでVATでは子どもの原子価を測定することができなかった。それというのもVATは文章完成方式のテストであるため、言語能力や文章構成能力を必要とするものなのである。そのため、これらの能力の発達段階である幼児や児童には実施は不可能であった。しかし、原子価の根源を知るために子どもを対象としたテストの開発が必要と考えVATch (Hafsi、河原崎、又吉ら、2004) という投影方式のテストを開発した。VAT、VATchはともにグループ状況下での個人が他者に見せる反応やつながりの方法に対する反応を見るものであり、各個人の最も優勢な原子価(依存、闘争、つがい、逃避)を測定することができる。

VATchの特徴としては、子どもが理解しやすくまた集中しやすいように絵本形式で作成しており、クマやブタ、うさぎなどの動物たちを登場させている。舞台は、動物たちの住むお菓子の国で物語は、力を合わせてみんなでお菓子の家を作っていくというものになっている。物語中にはVATを基にした事項があり、依存の項目が2項、闘争の項目が2項、つがいの項目が2項、逃避の項目が2項、協同指標の項目が2項の計10項が質問を含む物語になっており、ランダムに構成されている。回答は、4択で行い「肯定的行動」、「肯定的感情・思考的反応」、「否定的感

情・思考的反応」、「否定的行動」のうちから選択をする。

(2) 実際の尺度

VATchによる結果が子どもの行動に反映されているかどうかを測定するためにBionの理論を基に尺度を作成した。以下、その尺度は実際の尺度と呼ぶ。尺度の内容としては、依存を測定する項目が6項、闘争を測定する項目が9項、つがい測定する項目が6項、逃避を測定する項目が6項の計27項で構成されている。内容はそれぞれの原子価の性格的な特徴に注目し、子どもの集団生活において現れそうな性格を質問項目として取り上げている。より、客観的な視点での回答を必要とするため、幼稚園の先生に実施する。質問紙は5件法で求め、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」まで1～5点を与え、○を記入するという方法で実施した。以下は、実際の尺度の質問紙である。

3. 手続き

(1) VATchの実施について

VATchの実施に関しては、他者からの影響をなるべく受けないように園児1名に対し調査者1名がついて行なった。教示は、「今から読む絵本は、まだ出来上がっていません。○○ちゃん、絵本を完成させるの手伝ってこないかな?」というように園児に興味を持たせてからテストを開始する。調査者は物語を園児に読み聞かせていき、物語中にある質問の場面になったら、回答を一通り読み、園児に「どうしたかな?どれだと思う?」と問いかけ、園児に4つの選択肢から1つを選択させる。調査者は、回答用紙の選択した番号に○を記入していく。実施中は、調査者は園児に対して誘導的にならないように注意し、言葉は変えずに物語・質問・選択肢をそのまま読み聞かせながら行った。また、園児の集中力がきれてきた場合には無理に行わずに休憩を入れたりしてから行うなど工夫をし、臨機応変にテストを実施した。

(2) 実際の尺度の実施について

実際の尺度の質問紙は、幼稚園での園児の生活や性格について最もよく理解している先生に対して行い、A先生、B先生、C先生、D先生の4名の先生を対象に実施した。4人の先生方にはVATchを受けた園児1人1人に対して、先生の視点から見た園児の様子や性格について、質問紙の1～5の数字に○を記入して貰った。

なお、VATchと実際の尺度の質問紙は平成16年8月から平成18年8月にかけて実施した。

V. 結果

1. VATch (Valency Assessment Test for children)

奈良大学附属幼稚園の園児76名のVATchは、VATの得点化マニュアルに基づいて採点された。選択方式であるため、それぞれの原子価項目の点数を足した後、平均を出した。そして、4つの原子価のうち最も平均点が低いものを活動的原子価とし、原子価が決定した。

【子どもの性格に関する調査】

子どもさんの性格についてお聞きします。
 以下のそれぞれの項目について「非常に当てはまる」と思うものには5、「全く当てはまらない」と思うものには1というようにそれぞれの質問に対して当てはまる場所に○をつけてください。

| | 全く当てはまらない | あまり当てはまらない | 当てはまる | 少し当てはまる | 非常に当てはまる |
|------------------|-----------|------------|-------|---------|----------|
| 1. 甘えんぼうである | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 2. 負けず嫌いである | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 3. 正義感が強い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 4. 人見知りをする | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 5. 人の世話をしたがる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 6. 先頭に立って物事を進める | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 7. お調子者である | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 8. 明るい性格である | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 9. ルールはしっかり守る | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 10. 弱い子を守ろうとする | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 11. 初めての人にも話しかける | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 12. 単独行動をよくする | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 13. 失敗を引きずる傾向がある | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 14. 怒りっぽい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 15. 友達の中では控えめである | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 16. なんでも一人でやりたがる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 17. 面倒見がいい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 18. すぐ飽きる方だ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 19. 自分のことを話したがる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 20. 自分のペースで行動する | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 21. 一つのことに集中する | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 22. 小さなことで機嫌を損ねる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 23. 異性の友達と仲が良い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 24. 時間にルーズである | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 25. いたずらっこである | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 26. 目立ちたがり屋である | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 28. 好奇心が強い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

Figure 3 実際の尺度の質問紙

結果は、依んの原子価が25名 (32.9%)、闘争の原子価が14名 (18.4%)、つがいの原子価が24名 (31.6%)、逃避の原子価が13名 (17.1%)であった。

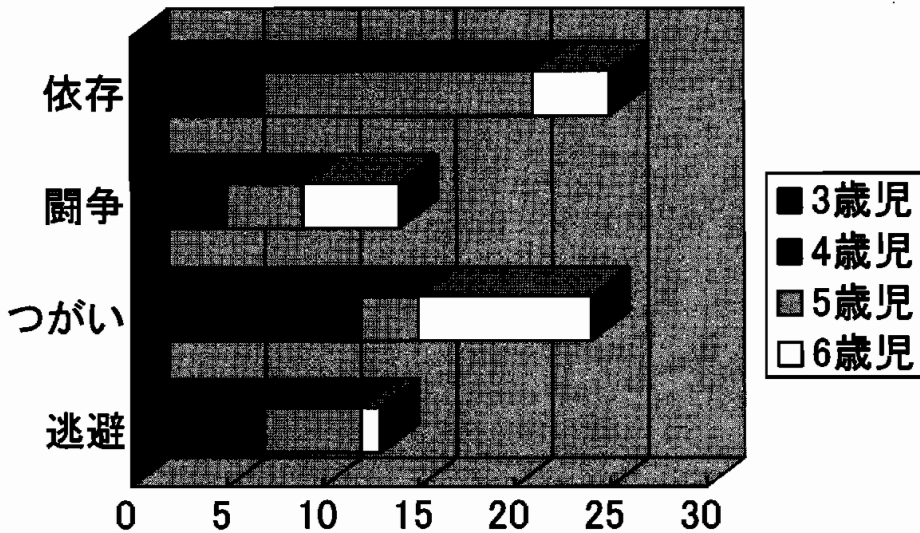


Figure 4 VATchの年齢別で見た採点結果

2. 実際の尺度の質問紙

質問紙の信頼性を調べるため、Crombach's alphaを求め、信頼性の検討を行った。その結果、 $\alpha = 0.709$ と内的一貫性が得られたため、信頼性が確認された。

Table 1に示されているように、実際の尺度 (27項目) を主成分法の因子分析を行い、4つの因子を抽出した。因子は、原子価の特徴を参考とし、本研究の因子名を次のように命名した。

第1因子は、「Q7: お調子者である。」「Q6: 先頭に立って物事を進める。」「Q26: 目立ちたがり屋である。」「Q19: 自分のことを話したがる。」「Q5: 人の世話をしたがる。」「Q25: いたずらっこだである。」「Q8: 明るい性格である。」「Q27: 好奇心が強い。」「Q23: 異性の友達と仲が良い。」「Q17: 面倒見がいい。」「Q4: 人見知りをする。」「Q18: すぐ飽きる方だ。」「Q11: 初めての人にも話しかける。」「Q15: 友達の中では控えめである。」といった項目内容であった。これらは、つがいの原子価の特徴である明るく快活な行動であることから「**つがいの行動**」とした。

第2因子は、「Q24: 時間にルーズである。」「Q3: 正義感が強い。」「Q2: 負けず嫌いである。」「Q10: 弱い子を守ろうとする。」「Q9: ルールはしっかり守る。」「Q13: 失敗を引きずる傾向がある。」といった項目内容であった。これらは、依んの原子価の特徴である順応性がみられるため「**依存的行動**」とした。

第3因子は、「Q12: 単独行動をよくする。」「Q22: 小さなことで機嫌を損ねる。」「Q14: 怒りっぽい。」「Q20: 自分のペースで行動する。」といった項目内容から、原子価の闘争に相当する特徴であるため、「**闘争的行動**」とした。

Table 1 実際の尺度の因子分析

| | 項目 | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | 第4因子 |
|------------------|-------------------|-------|-------|-------|-------|
| つ が い 的 | Q7：お調子者である。 | .763 | -.250 | -.010 | -.047 |
| | Q6：先頭に立って物事を進める。 | .757 | .293 | .074 | -.041 |
| | Q26：目立ちたがり屋である。 | .754 | -.011 | .017 | -.355 |
| | Q19：自分のことを話したがる。 | .644 | .322 | .278 | -.195 |
| | Q5：人の世話をしたがる。 | .629 | .317 | .001 | .387 |
| | Q25：いたずらっこだである。 | .607 | -.242 | .215 | -.142 |
| | Q8：明るい性格である。 | .592 | .100 | -.439 | -.117 |
| | Q27：好奇心が強い。 | .570 | .322 | .197 | .147 |
| | Q23：異性の友達と仲が良い。 | .553 | .101 | -.468 | -.031 |
| | Q17：面倒見がいい。 | .550 | .341 | -.263 | .450 |
| | Q4：人見知りをする。 | -.521 | .375 | .417 | .230 |
| | Q18：すぐ飽きる方だ。 | .509 | -.406 | .326 | -.106 |
| | Q11：初めての人にも話しかける。 | .504 | -.204 | -.351 | -.375 |
| | Q15：友達の中では控えめである。 | -.503 | .120 | .124 | .052 |
| 依 存 的 | Q24：時間にルーズである。 | .092 | -.799 | -.232 | .100 |
| | Q3：正義感が強い。 | .153 | .796 | .171 | -.066 |
| | Q2：負けず嫌いである。 | .434 | .530 | .193 | .298 |
| | Q10：弱い子を守ろうとする。 | .273 | .517 | -.186 | -.008 |
| | Q9：ルールはしっかり守る。 | -.428 | .506 | -.196 | .071 |
| | Q13：失敗を引きずる傾向がある。 | -.211 | .295 | .249 | -.199 |
| 闘 争 的 | Q12：単独行動をよくする。 | .235 | -.220 | .592 | .307 |
| | Q22：小さなことで機嫌を損ねる。 | .281 | -.358 | .544 | .216 |
| | Q14：怒りっぽい。 | .463 | -.204 | .532 | -.063 |
| | Q20：自分のペースで行動する。 | -.124 | -.124 | .472 | -.132 |
| 逃 避 的 | Q16：なんでも一人でやりたがる。 | .234 | -.245 | -.046 | .658 |
| | Q1：甘えんぼうである。 | .138 | .172 | .141 | -.543 |
| | Q21：一つのことに集中する。 | -.261 | .298 | .338 | -.419 |

第4因子は、「Q16：なんでも一人でやりたがる。」「Q1：甘えんぼうである。」「Q21：一つのことに集中する。」という項目内容から、人と距離を置いて付き合う原子価の逃避の特徴に相当するため、「**逃避的行動**」とした。

VATchと実際の尺度の有意性と相関については現在は分析中である。

VI. 考 察

本研究では、子どもの原子価を測定するテストの妥当性と信頼性の吟味を行なうことが目的であった。しかし、今回は対象者の子どもたちの原子価サンプルが76名しかとれなかったため、質問紙の信頼性は出たものの妥当性の研究に行き着くことができなかった。

原子価の割合から見ても依存とつがいが多く、闘争と逃避が少なかった。このように偏ったデータであると、今後、質問紙との相関や一元配置分散分析を行なううえで偏った結果になるのではないかと考えられる。そのため、4つの原子価のデータが満遍なく揃え、分析をしていくことが必要と思われる。

VATchについては、大学生に対し信頼性と妥当性が証明されているVATとVATchの双方を施行してもらった上で、さらなる項目の改訂や見直しが必要であれば検討しなければならないと考える。また、実際の尺度については原子価の特徴を基に作成しているが、他の性格特性の質問紙も参考にしながら新たに改正すべきところを整理していくことも必要になるのではないだろうか。

今回の研究では、VATchの妥当性と信頼性の吟味を十分に行うことができなかった。このテストが子どもの原子価を測定する唯一のテストである。そのため、今後は妥当性、信頼性の吟味を十分に行い、幼稚園でまたは小学校で子どもたちのパーソナリティーの理解に役立つようなテストへと完成させることができるようにしていきたいと考えている。

参考文献

- 氏原寛 編他 (1992) 心理臨床大辞典 培風館
- Klein, M., (1946). Note on some schizoid mechanisms. In J. R. R. (Ed.), *Developments in Psycho-Analysis*. London; Hogarth.
- Kerberg, O., (1980) *Internal world and external reality: Object relations theory applied*. New York: Jason Arason
- Stock, D., & Thelen, H.A., (1958). *E-motional dynamics and group culture: Experimental studies and group behavior*.
- 住田正樹 (1985) 子どもの仲間集団と地域社会 九州大学出版会
- 中島義明 編他 (1999) 心理学辞典 有斐閣
- 野島一彦 編 (1999) 現代のエスプリ グループ・アプローチ 至文堂
- Hafsi, M., (2000). 基底的理想グループの再考～「退行」から「思考」へ～. 集団精神療法, 16, 75-82
- Hafsi, M., (2002). 触媒としての「特殊作動グループ」～Dグループにおいてそれを取り扱うとき～. 集団精神療法, 16, 35-44
- Hafsi, M., (2003). ビオンへの道標 ナカニシヤ出版
- Hafsi, M., (2004). 「愚かさ」の精神分析 ビオンの観点からグループの無意識を見つめて ナカニシヤ出版
- Bion, W., (1961). *Experiences in groups and other papers*. London: Tavistock.
- Bion, W., (1997). *A theory of thinking*. In *Second thoughts*. Heineman, London.
- Brown, R., 黒川正流 訳 (1993) グループプロセス-集団内行動と集団間行動- 北大路書房
- 三宅茂夫 (2001) 幼稚園における持続的遊び集団の相互作用過程-バールズの相互作用過程分析をとおりて- 兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科紀要
- Leon Grinberg., 高橋哲也 訳 (1982/1996) ビオン入門 岩崎学術出版